慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | P・W・クイッグ編『アフリカ : フォーリン・アフェアーズ読本』 |
| Sub Title | Philip W. Quigg (ed.) : Africa : a foreign affairs reader |
| Author | 小田, 英郎(Oda, Hideo) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1965 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.38, No.6 (1965. 6) ,p.144- 149 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 紹介と批評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19650615-0144 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Philip W. Quigg (ed.) :

# Africa : A Foreign Affairs Reader

F. A. Praeger, 1964, xii＋346pp.

## P・W・クイッグ編『アフリカ――フォーリン・アフェアーズ読本』

一　本書は、一九二二年創刊以来四三年にわたつて継続している外交・国際問題の権威ある専門誌 Foreign Affairs に、これまで掲載されたアフリカ関係の論文のなかから、サハラ以南を対象としたもの二四篇をえらんで、一冊にまとめたものである。Foreign Affairs 誌はこれまでに一〇〇篇を越えるアフリカ関係の論文を掲載したということであるから、アフリカについては以前から比較的力点をおいてきた方である、といえよう。Foreign Affairs 誌におけるアフリカの比重は、当然のことながら、アフリカの抬頭が目だつてきた一九五〇年代の末ごろから、ますます大きくなつてきている。いま、試みに、「アフリカの年」といわれた一九六〇年から最新号（一九六五年四月号）までを例にとつてみると、その間に出版された二二冊（同誌は季刊である）のうち一八冊がアフリカ関係の論文を掲載しており、その数は二九篇にのぼる。ことに一九六一年七月号のごときは、全部で一三篇のうち四篇がアフリカ関係の論文なのである。同誌がアフリカ問題にさく頁数は、今後、国際社会におけるアフリカの比重が増大するにつれて、ますます多くなつていくとともに、すでに変化しつつあるその論点ないし観点はさらに急激に変化していくであろうことが予想される。

その意味から考えれば、同誌が過去四〇年以上にわたつて展開してきた論調をここでひとまず整理し、一冊の書物にまとめて出版したのは、まことに意義ふかいことといわねばならない。なぜなら、われわれは、本書によつて、アフリカ問題がもつ歴史的性格の変遷を知りうるばかりでなく、本書の編集方針をつうじてアフリカ問題に対する Foreign Affairs 誌、ならびに Council on Foreign Relations の態度ないし姿勢の一端をつかむことができるからである。

以下に示すように本書は、二四篇の論文をそれが対象としている問題の性格にしたがつて、六つの部分に分割整理している。ここでは二四篇の論文を個別的に詳細にわたつて紹介する紙数をもたないので、その論点を指摘するにとどめる。

二　それではまず、本書の構成を目次で示しておこう。

Part I　Zephyrs of Change

The White Man's Task in Tropical Africa
October 1926　Sir Frederick D. Lugard

The Black Cloud in Africa

July 1926 Evans Lewin

Worlds of Color

April 1925 W. E. B. Du Bois

Part II The Differing Faces of Colonialism

British and French Colonial Technique in West Africa

January 1937 Derwent Whittlesey

Belgian "Colonialism"

October 1955 Pierre Ryckmans

Portugal in Africa

April 1961 James Duffy

Part III Self-Government, Ready or Not

Native Self-Government

April 1944 Melville J. Herskovits

British Aims in Africa

October 1949 Elspeth Huxley

The British Problem in Africa

July 1951 Margery Perham

The New African Profile

January 1962 Chief H. O. Davies

Part IV African "Isms"

Pan-Africanism: A Dream Come True

July 1959 Paul-Marc Henry

The Coming Showdown in Central Africa

January 1961 N. M. Shamuyarira

Communism and Nationalism in Tropical Africa

July 1961 Walter Z. Lequeur

Part V Dead End in South Africa

Race Questions in South Africa

January 1927 Patrick Duncan [Sr.]

Fear in Africa

October 1949 Sarah Gertrude Millin

Alternatives to Apartheid in South Africa

January 1952 J. W. Patten

Toward a World Policy for South Africa

October 1963 Patrick Duncan [Jr.]

Part VI The New Leaders

Black Africa and the French Union

July 1957 Félix Houphouet-Boigny

African Prospect

October 1958 Kwame Nkrumah

West Africa in Evolution

January 1961 Léopold Sédar Senghor

African Problems and the Cold War

October 1961 Sylvanus E. Olympio

Nigeria Looks Ahead

October 1962 Sir Abubakar Tafawa Balewa

Africa's Future and the World
October 1962 Sékou Touré

The Party System and Democracy in Africa
July 1963 Tom J. Mboya

まず第一部では、イギリス植民地の経略に直接タッチした人物としての立場からリュガード卿が、さらに学者としての立場からリュウインが、それぞれ植民地経営の意義について論じ、他方ではパン・アフリカニズムの父とよばれ、アメリカの黒人運動に巨大な足跡をのこした混血の指導者デュボア博士が、アフリカにおける植民地勢力の型とその実績について論評している。前二者の基本的立場を構成しているものは、アフリカを教化し向上させアフリカの開発をおしすすめなければならないという白人の使命感であり、そのために、イギリス・コロニアリズムに特徴的なリュガード的植民地経営方式は正当化されるのである。Dual Mandate 方式はまさしくこうした使命感の具現化である。リュウインが引用している「われわれはアフリカ文明を発展させ前進させることを受託しているばかりでなく、この豊かな諸地域を世界から受託してもいるのである。このことは、われわれが、この偉大な大陸の莫大な経済的資源開発の義務を、人類に対して負つていることを意味する」というリュガードの言葉は、植民地支配における使命感的正当化の論理を、端的に表現している。編者が指摘しているように、現在の後進国援助の論理は、この使命感の論理の延長線上にあるようにも思えて興味ぶかい。

デュボアの論文は、前述のようにかれ自身が黒人運動に身を捧げてきただけに人種意識が前面にあらわれ、したがつて西欧諸国のアフリカにおける植民地支配を比較検討する場合にも、たとえば、もつともスムースに自治と独立をあたえたことで、こんにちでは比較的たかく評価されているイギリスに対してきびしく、アンゴラ問題などで悪名たかいポルトガルに対してもつともたかい評価をあたえていることなどが注目をひく。一九二五年の時点でデュボアがポルトガルの植民地支配方式をもつともたかく評価したのは、同国が同化政策を土台として、アフリカ人中の開化民 civilizada を同化民 assimilado としてポルトガル市民の範疇に含めるという、形式上の平等化方式をとつていたからであろう。現在の時点でみればこの評価は当然逆転すべきであろうが、だからといつてデュボアの論文を皮肉な目をもつて読む気にはならない。なぜなら本論執筆当時、全米黒人向上協会（NAACP）をつうじてアメリカの黒人のための平等化運動を指導していたデュボアにすれば、こうした観点からアフリカ問題をみるのは極めて自然なことと考えられるからである。

第二部におさめられた三論文は、イギリス、フランス、ベルギー、ポルトガル四ヵ国の植民地主義を検討したものである。このうちでアメリカの地政治学者ウイトルシーの論文は、対照的なイギリスの間接統治方式とフランスの直接統治政策ないし同化政策についての平易な解説にとどまり、とくに明確な主張をからませてはいないようである。つぎの、ベルギー植民地主義に関する論文は、執筆

者のリックマンズがコンゴ総督を長期にわたつてつとめた（一九三四―一九四七）人物であるだけに、ベルギーの父権主義的統治方式に対する強い自信を随所にうかがわせている。かれは「植民地体制をできるだけはやく終らせるべきだ」という国際世論（この場合かれはダレスの言葉を引用している）に対して、植民地の社会的、文化的、経済的進歩を目的であるとすれば、政治的進歩をもたらすべき植民地支配は、目的に対する手段の役割をになつているとし、たとえば現段階で部族民に選挙権をあたえるようなことは、デモクラシーをカリカチュアライズするにもひとしい、というのである。しかし、そこに白人の使命感的な論理がつらぬかれていようとも、こうした論理がベルギー領コンゴにあてはまらないことは、一九六〇年の独立以後におけるコンゴの情勢を一べつすれば明らかであろう。かれがコンゴ紛争前夜の一九五九年に世を去つたことは、むしろしあわせであつた、というべきであろうか。

つぎのポルトガルの植民地主義に関するダッフィの論文は、アフリカ開発に対するポルトガルの真剣な態度を一応認めながらも、本国が貧困であることからその開発計画が実効性をもちえないばかりか、むしろ搾取の度合を強める結果になつていることを指摘している。

第三部は自治の問題である。ここに収録された四論文はいずれもアフリカ人の自治能力について、それぞれ独特の議論を展開している。たとえばハースコヴィッツはいわゆる文化相対主義に立脚し、土着民が多くの点で高度の自治能力をもつていることを主張するとともに、現在ある土着民とヨーロッパ人のあいだの悪感情は、思いあがつた white man's burden 意識がその原因であると指摘するのである。したがつてハースコヴィッツの提案は、戦後世界の秩序は英米的なモデルに基礎をおいて再構成されるべきだという観念を放棄し、まず土着民に地域的、文化的な自治をあたえ、しかるのちにかれらを戦後世界へ統合するよう（強制するのではなく）誘導するのがもつとも妥当である、というところに帰着するのである。

これに対して、ケニア人ハックスリー女史の筆になる論文は、ヨーロッパ人がアフリカ文化の調和を破壊し、しかもその代替物をあたえなかつたことを指摘するとともに、今後アフリカ人がヨーロッパ人の後見なしに自らの道をみいだしうるか否かは疑問であるとし、アフリカ人を現在のままの状態に放置することは犯罪であると断じている。またパーラム女史の論文は、ハースコヴィッツとは逆に、アフリカ人の自治能力に関して、極めて暗いみとおしを示している。

第四部はアフリカにおける「イズム」の問題である。ここでとりあげられているのはパン・アフリカニズム、ナショナリズム、コミュニズムであるが、このうちパン・アフリカニズムに関する論文（P・アンリ）は、一九五九年五月にガーナ・ギニア連合が成立したことを契機として書かれたものであり、これによつて、これまで断絶していた旧英領アフリカと旧仏領アフリカとのあいだに橋がかけられたという認識にもとづいて、特殊アフリカ的なイデオロギーおよび運動としてのパン・アフリカニズムがあたらしい段階にはい

つたことを指摘している。本論文が掲載されたのは一九五九年七月号（本書のなかでは一〇月となつているが、これは七月の誤り）であるが、その後アフリカ諸国が、内部に対立的要因をはらみつつもとにかく南アをのぞく全独立国からなるアフリカ統一機構（OAU）にまで一体化をおしすすめてきたことを考えれば、本論文に A Dream Come True とサブ・タイトルを附したのも、けつして軽卒ではなかつたといえるであろう。

ソールズベリーで発行されている日刊紙 African Daily News の編集長シャムヤリラの論文は、いまは解体したローデシア・ニアサランド連邦について、批判的な立場から書かれたものである。いうまでもなくイギリスが「アフリカにおける人種的協調のモデル」を表看板にしてつくりあげたローデシア・ニアサランド連邦は、一九五三年に成立して以来するどい批判の対象となつてきたものであるだけに、本論文の趣旨は首肯しうる点を多くもつているが、第四部の主題が「イズム」であることから考えれば、それがイズムに直接関係をもたない論文であるだけに、ここに収録するのは、いささか当をえていないように思われる。

つぎのラッカーの論文は、コミュニズムがアフリカに浸透するとしても、その場合にはそれはヨーロッパ的ないしソ連的マルクス・レーニン主義とは異つた、べつのタイプのコミュニズムに変形してしまうであろう、ということを示唆した興味ぶかい趣旨のものである。かれの経歴については、あらためて紹介するまでもないであろう。



第五部は南アの人種問題が主題である。ここにあつめられた四論文の執筆者はすべて南アの白人であるが、とくに興味をひくのは、南アの元総督パトリック・ダンカンとその息子である同名のパトリック・ダンカンが、それぞれまつたく異つた立場から書いた論文がおさめられていることである。前者が一九二七年に書いた論文は、非白人に対して同化と隔離の中間をいく方式を主張しているのに対して、後者が一九六三年一〇月に発表した論文では、アパルトヘイトを真向から否定し、多数者による立憲的政府の樹立をさけんでいる。後者は南アにおける急進的な反アパルトヘイト勢力「パン・アフリカニスト会議派」に加入している数すくない白人の一人である。

第六部は、アフリカの新時代を代表する七人のもつとも有力な指導者（このうちトーゴ共和国元大統領オリンピオだけが故人となつている）の論稿を再録したものである。むろんこのなかには、ウフェボワニ（アイボリー・コースト大統領）、バレワ（ナイジェリア首相）、サンゴール（セネガル大統領）のような西欧化ナショナリストもいれば、エンクルマ、トゥーレなどのごときウルトラ・アフリカニストも含まれており、その姿勢はかならずしも一様ではないが、それだけに現段階におけるアフリカの基本的な傾向が、これらの論文によつて十分に代表されていることは確実である。したがつて本来、これらの論調こそもつとも力点をおいてここに紹介すべきであるかもしれないけれども、これら諸論文の多くはいずれも比較的最近になつて発表せられたものであるばかりでなく、すでにいろいろな機

会に翻訳（たとえばエンクルマの African Prospect は「世界」の昭和三十四年三月号に、阿部知二訳「アフリカの将来と非加盟主義」として掲載されている）あるいは解説をくわえられ、すでに周知のものが大部分であるので、ここでは省略する。

三　以上、本書の概要を、コメントをくわえつつ紹介した。ここで総合的な読後感をのべればつぎのごとくである。

まず第一に、本書は極めて適切に編集されている。六つの項目ないしテーマのなかにはたとえば前二者のように本来歴史的範疇にはいるべきものがあつても、そこに収録された論文の趣旨をたどれば、すべてかならず現代的な問題につながつてくるのである。本書の編者クイッグは、序文のなかで、「現代的な論文もあり　また歴史的興味をよぶ論文もあるが、その全部が、アフリカの現在および未来に関係をもつたことをのべているという理由で選ばれた」といつているが、この編者の選択眼がいささかもくもつていなかつたことが、本書を一読すればわかるのである。また本書の土台になつている Foreign Affairs 誌の編集方針がそうなのであろうが、執筆者が植民地経営者、アフリカ・ナショナリスト、学者、ジャーナリスト、政治家等バラエティーにとんでいることも、本書の性格に幅をもたせている原因のひとつであろう。

本書は、いわゆる学術書ではない。しかしながら、それだけにむしろ、アフリカ問題特有の体臭を、よりつよく、ナマのままで伝えているように思われるのである。

一九六五・四・一六（小田英郎）